

第10章 拡大する教会における祈り④



一致した祈りを通して解放をいただく 働き人を派遣する際に導きをいただく



一致した祈りを通して解放をいただく

教会の前進は、多くがリーダーシップに左右されます。それは軍隊による征服が将校によって左右されるのと同じです。サタンもこの現実に気づかずにいるわけではなく、最も効果のあるところを最も激しく叩いてきます。神は目的を成し遂げるために、人を通して働くことを選ばれますが、サタンも同じく、欲しいものを得るためには人間の使いを用いてくるのです。ヘロデ・アグリッパ一世は、サタンの共犯者として、ペテロを捕らえ投獄しました。彼は、ヤコブとペテロこそが、生まれたての教会が頼みにしている二人の中心的人物であり、彼らを除くすれば全体の構造も崩壊すると考えました。そこでヤコブを捕らえて処刑させます。そして、ユダヤ人が喜んだのを見て、今度はペテロを捕らえ、厳しい監視下に置きます。「**こうしてペテロは牢に閉じ込められていた。教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた**」(使徒 12:5)。ヘロデは、その墮落のゆえに、実際には全能者と戦っていることに気づいていなかったのです。

ここでもまた、私たちは祈りの持つ恐るべき力に注目させられます。祈りがなされるまでは、サタンが有利な状態にあります。教会のリーダーたちが激しい攻撃にさらされている今日、私たちはこの事実を心に留めておくべきです。初代教会は、ヤコブの死とペテロの投獄から来る大きな懸念に悩まされ、祈りに対して非常に真剣になりました。彼らは、私たちが行いがちな、心ここにあらずの祈りではなく、「**熱心に祈り**」続けていたのです。それは切なる祈りでした。

ここでもかなり重要なことは、教会全体が祈っていたということです。個人で、隠れたところで祈る時と場所もありますが、教会全体で共に重荷を担いつつ祈る時もあるのです。教会の存在理由である使命が脅かされる時は、教会を挙げて祈るべきです。この若い教会も、一つの事柄のために祈りで一致しました。それは、教会と世界の

ためにペテロの命が守られるようにという祈りでした。

これは具体的な祈りでした。みこころの中で具体的に祈るなら、具体的な答えがもたらされます。そのような祈りは、答えられてもほとんどわからないようなあまりに大雑把な祈りを消し去り、私たちの願いを精錬してくれます。具体的な祈りは、願う者の信仰を試し、お願いをする以前にみこころを探ろうとさせます。あるいは、少なくとも、何がみこころかについて少しでも不確かなところがあるならば、喜んでそのみこころに自らを明け渡そうとさせるのです。

ペテロの切迫した状況には、迅速な答えが求められていました。即座の祈りが必要とされていました。遅れはヘロデの裁断を受け入れるのと同じことでした。神の摂理として、ユダヤ教の祭日のためにヘロデのよこしまな意図は遅れ、教会が祈れる時間が少し生まれました。ここで教会が判断を誤れば、結果は恐ろしいものとなることでした。しかし、教会は祈りました。そしてそれゆえ、超自然的なご介入が起こりました。鎖が外れ、門番は気づかなかったか、脱獄しようとする囚人が見えませんでした(マタイ 28:4 も参照)。門は勝手に開きました。ペテロは解放されたのでした。

ペテロの解放の話からも、祈りについての教訓をいくつか学ぶことができます。教会のリーダーたちが攻撃を受けても驚いてはいけません。リーダーたちのための真摯な祈りは、常に祈りに組み込まれていなければならないのです。教会に対する攻撃があまりに熾烈で、神から委ねられた働きが妨げられそうに思われるとき、キリストの御体は即座にかつ継続的に、真摯な祈りを結集すべきです。祈りはまた、はっきりと具体的な必要に向けられたものでなければなりません。

そして、みことばに啓示されたものとして、みこころに支配されたものでなければならず、そのみこころが真にわかったならば自分たちを喜んで明け渡す思いに支配されたものでなければなりません。この話からわかることにはさらに、神は、祈っている人々が実際にはすぐに答えを期待していないような時にも(ペテロが門のところにいとロダが言った際の彼らの言葉に注目すること。「あなたは気が狂っているのだ」「それは彼の御使いだ」(使徒 12:15))、不可能な状況における真摯な祈りに答えてくださるのを見ることができるのです。

働き人を派遣する際に導きをいただく

教会が生まれた時から、宣教はその優先事項でした。宣教は神ご自身の胸の鼓動です(ヨハネ 3:16、ルカ 19:10 を参照)。教会が神の心に近づくほど、宣教は教会の心にますます重くのしかかってくるのです。「彼らが主を礼拝し、断食をしていると、聖霊が、『バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい』と言われた。そこで彼らは、断食と祈りをして、ふたりの上に手を置いてから、送り出した」(使徒 13:2-3)。ここで「礼拝する」という動詞は、ギリシア語「レイトゥールゲオー」であり、私たちが今日使う「典礼」(liturgy) が生まれてきた言葉です。使徒 13 章での用法では、讃美と祈りが共存している様を表しているように思われます。ここに断食を加えれば、熱心で一致した主への礼拝が眼前に広がります。そのような状況では、幻が生まれ、人々は自らの歩みに対して神からの導きを見出すのです。

集まっていた人の群れに聖霊がどうお語りになったかについては、語られていません。必要な手引きを得るた

めの手段よりも、必要な手引きを得ることそのものが結果としては重要です。絶対に重要なものである導きそのものを犠牲にしてまで、導きを与えられる方法のほうを過度に強調するというのは、いつの時代にも存在する傾向です。もちろん、方法そのものに関心を抱くべきではないというわけではありません。というのも、そこに関心が無ければ、せっかくの導きも見逃してしまったり、いただき損ねてしまったりしかねないからです。子ども時代のサムエルも、神からの導きをいただく方法を教えてもらってはじめて、それに気づき、いただくことができました（Iサムエル 3:1-14 参照）。使徒の働き 13 章が語っているのはただ、「聖霊が……言われた」というだけです。

このみことばがどのように伝えられたかについては、いくつかの可能性がります。

- ① 一人ないしそれ以上のリーダーたちの心に強い印象があったことによって（使徒 8:29、9:15-16 参照）
- ② 幻を通じて（使徒 9:10、10:3、10-16、16:9 参照）
- ③ 預言的な賜物を通じて（使徒 15:13、28、32、21:11 参照）

の三つです。第三の可能性に関しては、十分な注意が不可欠です。聖書では、この方法を支持する証拠はきわめて散発的にしか見られないからです。イギリスの著名な聖書学者ドナルド・ジーは記しています。「新約聖書を見ると、神の導きを知る手段として意図的に預言の賜物に頼っている例は一例も無いと断言できる」。

パウロとバルナバは、それ以前に既に主から召されていました。ここでは、主に仕えてきた直接の結果、また、断食の直接的な結果として、アンテオケの教会が地域における彼らの務めを解き、外に派遣するよう励ましを受けています。この集った群れが、「だから、**収穫の主**に、**収穫のために働き手を送ってくださるよう**に祈りなさい」（マタイ 9:38）という主のご指示に従って祈ったということは、少なくともあり得ることです。初めての宣教師の聖別は、祈りと断食に伴うものでした。主にお仕えし、断食をすることすら、教会を整えて聖霊のご命令を聞くための備えとなったように、断食と祈りは彼らの派遣の過程の一部でもあったのです。「**そこで彼らは、断食と祈りをして、ふたりの上に手を置いてから、送り出した**」（使徒 13:3）。なすべき働きは霊的な働きでした。通常の人々のための方法や実践では、今もそうですが、当時も十分ではありませんでした。教会のための導きは霊的なものでなければなりません。教会からの人の派遣も霊的なものでなければなりません。その働きは、聖霊の力によるのでなければならぬのです。教会が霊的な活動に関わるならば、霊的な働きと外への伝道のための舞台を整えることとなるのです。

アンテオケからはパウロとバルナバとが、福音を携え、彼らにとっての世界へと出て行きました。

そして、あらゆる時代が学ぶことのできる宣教の一つの型というものを確立するところとなったのです。

この箇所からもいくつかの教訓が学べます。教会のリーダーたちは、とりわけ祈り、主への礼拝、断食などの霊的な活動のための時間を優先させるべきです。働き人を選び、派遣するに際して、聖霊からの導きをいただくことを学ぶ、それに従うことを学ぶことは、実り多き宣教の働きにとって本質的なものです。どのような手段を取られるにせよ、聖霊こそが神の導きの源です。そして、讃美と祈りの雰囲気の中でこそ最善の働きをなしてください。教会への導きにおいて聖霊が目に見える形で関わってくださるとき、外へと出て行く働きこそが教会にとって一番の関心事となっていくのです。